
小ネタ

湊美耶子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小ネタ

【Nコード】

N4494R

【作者名】

湊美耶子

【あらすじ】

『女落』『ハレルヤ』の各主人公を交換してトリップさせてみるとどうなるか……

(前書き)

if.....トリップ先が逆だったら.....

ワカバインディリトア王国

突如、少女は異世界に落ちた。

ドサツと言う重いものが落ちた音と

「キヤツ！」

というかわいらしい悲鳴を上げて、だ。

大人数でお祈りしているところに落ちた。

落ちてから周りを見渡す余裕ができたその瞬間「明日の小テストっ！？」、と明日の学校でのスケジュールのことを考えた。

何せ落ちる前は、勉強が終わり、さあ、お風呂に入って寝ようかな！というところだったのだ。

少女はいつも学校から帰ると制服を脱いでパーカーなどの部屋着で過ごす。

冬の足元の冷え防止にと思い、もこもこ靴下も履いていた。

しかし、風呂には入れなかった。

落ちたからだ。

風呂に行こうと自分の部屋から出た瞬間に「落ちた」のだ。

落ちた先では先ほどもあったように、なにやら集団で女神様のような白亜の像の前で熱心に祈っていた。

落ちた少女と祈る集団との勿論初めての迎合である。
呆然とするしかない両者たちであった。

それからしばらくして、一人の男が我に帰ったようであった。

その男は一言で言うなれば、偉そうだった。
理由は服装にある。

眼に飛び込んでくる色彩情報が白、緋色、黒、金と銀で、ロココ調の男性貴族服といえは分かるだろうか、とにかく細かい刺繍で彩られているため、少女にはそう思わせたのだ。

そして偉そうな上に美形だった。

今時の言葉で言えばイケメンだった。

偉そうなイケメンは優雅な動作で少女に近づいていった。

足音なんて立てない。

ス、と少女に手を差し出してきた。

立て、ということらしい。

少女はまだ座り込んでいたのだ。

落ちたという感覚はあったのだが不思議と痛みはない。

「あ、ありがとうございます…」と少女はこれ以上のイケメンに出会ったことがないなと考えながらお礼を言つと、「話ができるように安心した」と冷静に返された。

言葉が通じないのは非常に辛い。

英語すらろくに喋れないのに海外旅行に行っちゃって簡単な買い物するにも一苦労！

のような方には言わずもがな、だろう。

特に数学においては高スペックな処理能力を持つ頭脳を所有する少女であったが、いきなりの出来事に理解が追いつかない。

しかしながら、この異世界トリップセオリー其の巻「言語はなぜか日本語」を華麗にスルーし、私芸能人じゃないからドッキリとかお断りなんですけど……と考える余裕はあった。

少女が「何が起こったのでしょうか？」と冷静に切り返したところで、イケメンは「こちらも未だに何が起こったのかが理解できていない、別室で座って話をしよう」とのことだった。

別室と言われた大きい長方形のテーブルがある会議室に案内されて、イケメンの前に当たる席に案内されたのでソコに座る。

イケメンには、失礼だが兵を背後に立たせてもらうがどうか？と言かれ、少女は（手が込んでるな、このドッキリ）と思いつつ、構わないと冷静に返した。

偉そうなイケメンを筆頭に、白いフードを被ったこれまたやっぱり偉そうな魔法使いもどきや、お貴族様ですが何か？というような風貌及び服装のハゲジジイ共に、何故ココに落ちたのか？何処から来たのか？という質問をされたが、少女は、逆に何処にカメラがあるんですか？、私は芸能人じゃありませんがどうして私が対象に選ばれたんですか、とドッキリ説を頑なに信じて、双方がちくはくな返答していった。

しかし、現状を理解していった少女はココが自分の住んでいた日本でもなく、その日本のあった地球ですらなく、異世界だと確信したことによって、だんだんと興奮してきたようだった。

両手を握り締め、テーブルを押し付けるように唸っている。顔を赤くさせ、何で自分が！と考え始めた。

「明日の小テストが受けられないかもしれないじゃないっ！」

大好きな数学の小テストをまた満点取ってやるうと思っていた少女に罪は無い、しかもっと別なことを考えたらどうだろうか。

「……………ココに落ちた理由とやらをはっきりさせよう。おそろくなのだが……………」

一番偉そうな、お美しいイケメン様が口を開く。

喋り方も優雅というか雅^{みやび}だ、おそらくハリウッドあたりの一流芸能人とかなんだな。まあ、そんなやんごとなき身分の人にどつきり仕掛けられてる自分は何者なのだろうと少女は今更なのに本気で思った。意外にこの少女、お馬鹿さんかもしれない。

そういえば双方自己紹介とかしてない……………まあ、今更か、とも思った。

「今、余たちが行っていたのは女神ペクテー又様に国の安寧を祈願していたところだ。ペクテー又様は愛の女神、デイリトア王国国教の唯一神であらせられる。自己紹介が遅れたな、余はこの国の国王でアンドレア・デイリトアという。そなたの名は？」

目の前のイケメンは国王だった。

異世界トリップセオリー其の式「即、国のトップに出逢える」及び其の参「即、美形に出逢える」は難なくクリアした。

「伊藤雅葉^{イトウワカバ}……………ワカバが名前です……………」

ようやく名前を言った。

たった6文字を言うまでが長かった。

「ではワカバよ。女神から何を託された？」

しかし国王による返答は早かった、しかも短かった。

「いや、意味不明ですし」

少女の返答も早かった。

「われわれの願いを聞き入れ、ペクテー又様がそれに答えてくださったのだと思っただのだが……」

片眉をひそめ、国王は問う……というよりは呟いた。

「国の安寧って言ってますませんでしたっけ？私が国を安定させるってこと？17歳の小娘が？」

えっという驚きが周りから漏れた。

国王も若干目が見開いている。

中世ヨーロッパみたいな格好をした周りの見た目からして、「えっ」に続く台詞が、「無理そう……」だろうなと思っただ少女は正しかったようでちよつとズレていた。

実際は年齢に驚いたのである、要は17歳に見えないのだ。モンゴロイド系の顔は総じて幼く見える。

この別室に座っている者たちは国王を含め、コーカソイド系統依りの顔立ちだった。

「17か…13、4程度と思っていたのだが」

国王が周りの声なき声を代弁する。

「人種の違いで若く見られるようですね……別に構いませんけど。」

私いつまでココにいればいいんでしょうか？」

そして異世界トリップセオリー其の四は「日本人はどうしても若く見られる」のようだった。

至極どうでもいいが、あとどのくらいセオリーがあるのだろうか？

……そこは追々ナレーションが説明してくれるだろう。

「特に意味も無く落ちてきたと言うのであれば還してやりたいのだが、理由と方法が今のところないため、直ぐには返せぬ」

「……はあ……」

異世界トリップセオリー其の五が判明。

「すぐには帰れない」ようであった。

少女のため息に、何故このような危なげな色香を出すのだろう、日本と言う国は少女にとってそんなに過酷なんだろうかと室内の者全員が思った。

少女の所為で大和撫子という言葉の意味が間逆にされそうである。

「そんなに帰りたいたのであれば全宮廷魔術師および個人研究魔術師にお前の帰還方法を探らせよう、とりあえず安心しろ」

このような時に権力は使われるべきだからな、と以外に爽やかに笑い、国王によって『異世界人帰還方法の探索』命令が発布された。

「わかりました、よろしくお願いします」

ワカバが落ち着いた声とともに頭を下げる。

ゆるく笑みを浮かべていた国王を含め、別室に集まった者全員に美

しいと思わせた。

「女神の真意が早く明らかになればいいのだがな……」

この場で一番若いであろう魔法使い風の男、少年よりの歳若い青年、おそらくは宮廷魔術師である。たった一人だが、少女を見詰めながら、「同じ年かあ……女神様へのお願い事みんな何願ったんだろ……国の安寧って正直陛下だけだよなえ……」と呟いていた。ことは真白いフードを被って口元が見えづらいこと、輪をかけて声が小さいことで、何と誰にも気づかれなかった。

フミ「あれ？イシユ一目惚れしないの？」

イシユ「僕、美人系は好みじゃないです」

ワカバ「さいですか……」

カイゼ「いや、ワカバは怒っていいと思うぞ」

フミ「じゃあイシユはどんなのが好みなの？」

イシユ「勿論フミさんです！」

ワカバ「……こういう人たちを日本語で馬鹿ツプルって言うんですよ」

カイゼ「へえ、勉強になるなあ！」

……一目惚れは無いですよ？

フミンブルノ帝国

衆人環視の下で目が覚めた私は、再度、ココは？と呟いた。

その返答として「ココはタチバナ家の客間です、お嬢さん。」という日本語が聞こえた。

声の聞こえる方を振り向いたら、私はきよとんという擬音が似合う固まり方をしてしまった。

だって奥様（誰？）聞いてくださいます？驚くほどのっ！（何？）27年という中途半端に短い人生ではありましたが、私の目の前に見たこともないような金髪碧眼の美丈夫（今風に言うとイケメン）がいたのだっ！（興奮）

……この王子様モドキがああの流暢な日本語を喋ったというの？

ジャパニーズ

「ああ、橘さんのお宅ですか？」

でも苗字はタチバナさんとは……、ああ、ハーフなのか？

「そうだよ。ああ、間違いなくディリトア語だね。

よかったよ、たまたま実家に帰ってきてて」

「ディ……？」

何語と言った？私は普通に日本語を喋ってるんだけど？

「咽喉が渇きませんか？お茶を飲みますか？」

「あ、はい……いただきます」

『ディリトア語だね……まあ誰かお茶を持ってきてくれ』

『畏まりました』

イケメンさんは使用人らしき人におそらくお茶を持ってくるように言ったんだろうが、どれがお茶という単語で、どれが持って来いという単語なのが私には判らない。何人とのハーフなんだろう？

「さて、私の名前は太刀花タチハナ快世カイセ。あなたのお名前をお聞かせくださいませんか？」

イケメンさんのお名前はカイゼさん、か。日本人といえば日本人っぽい名前だし、違うと言われれば違う気がする。

「あ、私の名前は齊藤サイトウ歩美フミです。私は大きな庭で倒れていたと思うのですが、ここはどこでしょう？」

「はい、倒れていましたね、ちょうどあのあたりですよ。この場所は太刀花家本家の客間です。太刀花家は、ブエルノ帝国四大貴族の内の一貴族として有名な方なのですが……サイトウと言う苗字は聞いたことがありますね？本日は私の家の庭までどちらからいらっしやったのですか？」

なるほどココは先ほどのお屋敷の一部屋か。ものすごいゴージャスなので納得。

ああ、品のいいゴージャスっぷりです。

でも齊藤に聞き覚えがないって有り得ない……。

「え、日本じゃ斉藤はメジャーな苗字だと思いますが？私は市川市の自宅から通勤途中で車に轢かれました。直ぐに気を失ったようで、貴方の家の庭で倒れた記憶がないんですよ」

斉藤って鈴木と佐藤ほどじゃないけどそこらじゅうに居るよ？戸籍課勤務、舐めんなよー、同じ氏名の人うっかり検索したら市内に3人もいたぞ……。

「車に轢かれた？魔法列車ではなく、小型の魔法移送車ということですか？

それとも獣車きしゅうまですか？観光用の人力車ですか？
外傷は何処にもありませんでしたよ？」

「え、マホウ？マホウレッシャ？」

マホウって魔法？

「……魔法による移動手段を見たことがないのですか？」

「え、魔法が実在するわけないでしょう？魔法で動かすんですか？列車を？」

なんかファンタジーの世界が、来た。イケメンが魔法とか言っても普通に許されるね。一瞬普通に納得したからね。イケメンは何しても許されるのよ！って思ってた私はやっぱり正しかったよ。

「魔法を知らない……？そうですよ、魔法で動かすんです」

ピクピク？という擬音が正しく当てはまるかのように、目の前のイケメン、カイゼさんが私の台詞に動揺を走らせた。

「電気じゃないんですか？」

「電気とは？」

え、電気知らないの？じゃあこの部屋の明るさは何で？

「え？電気……電気は雷です！」

うん、自信持って言ってみただけど違う気がする。

あーん、理系人間じゃないのよ、私。

大学も法学部だったしさ。

「魔法は専門外ですが、習った知識程度で言えば、雷は風の精霊の怒気です。それを電気というのならば列車の動力源は違いますね。風の精霊の優しさですから」

「風の精霊？ドキ？優しさ？」

えーっと？精霊さん……ああ頭残念なイケメンさんか！ヤベツ！！
！ちよー好みだよ、残念なイケメン！いいよね、銀のギンさんとか、カツラさんとかさっ！

「……えーっと……私の言葉は理解できているけれど、私からの情報が理解できないと言う感じですか？」

いえいえ、お気になさらず、残念な人に対して私は紳士……いや、淑女ですよ。

「精霊さんは今ここにいますか？」

「いますけど？魔動力が高くないと見えませんよ？」

『とりあえず軍にしょっ引かせるよう連絡しておけ』

「そうですか、残念です……」

『とりあえず……部屋に入れるべきかな？』

『どつでしよう……？』

んーやっぱり何を喋っているのやら。

「どつして無傷なんでしょう、私。自分の血を見てから、気を失った気がするのに」

そついえば私は事故に遭つたんだつた。でも怪我も無い。

「ふむ、自身の血を見て、事故現場でそのまま気絶したという記憶があるにもかかわらず、見知らぬ私の家で倒れていた。ということになるよね。話してる最中に君を魔法探知させてもらったけど、君の情報が出てこないんだ。指名手配もされていないし、行方不明者の中にサイトウフミはいない。魔動力も0つて出るし。嘘をついてるつて反応もないし、正直こちらも判らない。君には何が起こつたんだらうね？」

また魔法です、どんだけ引つ張るネタがあるんだらう……しかも何か私に対して使われたようですが何か？

こつち系の残念さんはどう対処していいのか判らん。

つてなんか似たようなのがいた気がするけど……まあいいやヤツは

イケメンじゃなかったし。

庭綺麗だなあ……。

ところでこの樹木三兄弟はなんだろう？

あ、もしかして土木課で申請すると差し上げてる子供用の記念樹か！

「こつちがカイゼさんですよね？このハルヒとアオゾラも人名ってことですよね？綺麗なお名前ですね」

私は快世之木と書かれている立て札を指差しながら話した。

「え……ああ、真ん中はアソラと読むんだ……ありがとう」

フミ「あれ？そこはフラグ立たなきゃダメじゃない？」

イシュ「フラグって何ですか？」

ワカバ「……恋人同士になりそうな人たちが誕生した合図ってとかな」

カイゼ「……残念なイケメンと？（ちよつと機嫌悪い）」

フミ「え、だから好みて言ってるし？」

イシュ「酷いです。ひとつ隣の国に僕がいるんですよ！」

ワカバ「ひとつ隣って既にかかなり遠距離ですよ？」

カイゼ「大魔術師様だからなあ……距離なんて関係ないのかもな（呆れ）」

……フラグは立たないっすよ？

(後書き)

交換させても成り立つか?と思ったので交換させてみた。

ワカバはともかく、フミが不審者扱いになって連載終了なオチが待ってる気がした……。そしてフミの所属課今更ココで判明せんでもって気もした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4494r/>

小ネタ

2011年4月16日12時47分発行